



TITLE:

<大會抄録>北魏における"邑義"の 發生とその性格について

AUTHOR(S):

佐藤, 智水

CITATION:

佐藤, 智水. <大會抄録>北魏における"邑義"の發生とその性格について.
東洋史研究 1996, 55(3): 630-630

ISSUE DATE:

1996-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155010>

RIGHT:

る組織であったりする。また、村社、里社、郷社といった言葉も、時には同じ言葉が異なった意味で、時にはそれぞれの言葉が同じような対象に對して用いられたりすることも、史料の理解を困難にしていると思われる。

ここでは南宋の時代を中心に、里社、郷社、社日などという言葉で表現される信仰や祠廟の實態、民間のそのような信仰をめぐる官僚たちの批判などについて、主として従来の史料を再検討しながら、指摘されていた點を整理し、宗教史的な觀點からこの時代の變化がどのようなものであったのかについて、考えてみたい。

北魏における「邑義」の發生と

その性格について

佐藤智水

南北朝時代の五世紀後半（北魏太和年間）以降、都市や村落において邑會・合邑・邑義・法義などと自稱する在俗者中心の佛教信徒團體が、僧の指導を受けながら結成され、齋會や造像などの奉佛行事を行った。本報告ではこの種の團體を假りに邑義と總稱する。

初期の邑義は、核になる二乃至三の姓を中心に雑多な姓の者が加わるといった「血縁・地縁そしてときには官職を媒介とする關係を基にそれを佛法の縁で結んだ在俗信徒の組織」で、メンバーの數に多寡（十數人〜數百人）はあるが、大多數は官爵のない庶人であった。女性が参加しているのもこの組織の特徴である。邑義には長と

しての邑主、世話役としての維那などの役職があつて組織運営に當つていた。

從來、在俗信徒が寺院の行事の一端を擔うことや、或は自宅その他に僧侶・朋友を招いて齋會を催すことがあつて、それは引續き行われたけれども、邑義は持續的組織性を有する結社の性格を有する點、また組織の目的に皇帝崇拜・鎮護國家の祈願を含む點で、從來の在俗者の宗教活動とは性格を異にする。乏しい文獻史料によれば、八關齋會などの例は南朝に多い。文獻史料に比べ、造像・造塔・造窟等の石刻類は、近年の調査報告や紹介を加えて、格段に豊富で正確な史料として扱えるようになった。それに據れば、邑義の例は北朝に多く南朝では皆無に等しいこと、北朝後期の六世紀中頃以降には巨大な邑義も出現して、造橋・造井・道路補修などの地域社會の福祉事業を擔うまでに發展していることが判る。

今回の報告では、未だ明確でない邑義の發生の事情とその性格について、若干の考察を加え、主に次の三點について指摘したい。

一、邑義の結成には北魏佛教教團の積極的な意志が感じられる。その背景について。

二、初期の邑義結成の典型例は、龍門石窟古陽洞の造營に見ることができ。

三、龍門石窟のような造像供養を特徴とする北魏洛陽佛教は、六世紀初頭から華北各地に傳播するが、その受容については各地域において時間差・性格の差異があつた。